

ひたちなかの教育

第 59 号

令和 5 年 3 月 16 日 発行
ひたちなか市教育委員会指導課



大きいね (那珂湊第一幼稚園)



動物とのふれあい (三反田小学校)



おいもとれたよ (中根小学校)



心をあわせて (勝田第一中学校)

これからの教育とトランスクルージョン

参事兼指導課長 飯村 祐一

特別な支援を要する児童生徒への教育の概念については、今まで様々な変遷を経て今に至っている。私が大学で学んだ時の特別支援教育の潮流は、「ノーマライゼーション」への移行であった。そしてその後「インクルージョン」の概念が提唱され、分離教育から統合教育、そして包括教育へと時代の流れと共にその考えは変化してきた。さらに現在は、特に海外で、「トランスクルージョン」という概念のもと、さらに大きなフレームで教育を考えようとする動きが出てきている。

熊本大学の苦野一徳准教授によると、インクルーシブという言葉は、障害者や外国人などのマイノリティをマジョリティに取り込もうとする意図が含まれているという。それに対してトランスクルージョンは、一方が他方を取り込むのではなく、互いに影響を与え合い、変容しながら共生する姿を含意した概念であるとのことである。

折しも、今、教育界では、新時代の学びのスタイルとして「個別最適な学びと協働的な学び」の推進が強く求められている。このトランスクルージョンの考えは、まさにこれらに直結するものである。マイノリティもマジョリティもなく、多様な個性をもつすべての子供が学習権を保障され、交流を通して相互理解を深める。そして、協働によりお互いに成長していく。それは特別支援教育の範疇にとどまらず、教育の根本において必要とされることであろう。

大阪市立大空小学校初代校長の木村泰子さんは、その著書の中で、「個性を伸ばすことは、障害を長所に変えること。障害を長所に変えるのは、周りの子供を育てること。」と述べている。今後、学校も社会もダイバーシティ化が急速に進む中、真に共生する社会を創出できるかは、我々教師の双肩にかかっているととっても過言ではない。

後輩の皆さんに託す想い

市内の小中学校では、今年度をもって、1名の校長先生と1名の副校長先生がご退職になります。
長きにわたり、本市教育のために大変お世話になり、ありがとうございました。



「ハプニングを愉しむ余裕を！」

勝田第一中学校長 二川 忠典

思えば、あっという間の38年が過ぎました。

高校まで神奈川県や名古屋市に住んでいた私は、大学で見ず知らずの茨城に移り住み、そのまま教員人生を迎えることになりました。今思うと、この時点からハプニングの連続だったように思います。

新採の土浦三中を皮切りに、勝田一中→東海中→佐野小→田彦中→照沼小→波崎二中→阿字ヶ浦中→再びの勝田一中と様々な地で貴重な経験をさせていただきました。

その間、多くの児童生徒、保護者、先生方、地域の方との奇跡的な出会いが私を成長させてくれました。

理科教育、生徒会活動、生徒指導・教育相談、学級経営、手書きで書いた学級通信『^{みち}径』、何と言っても多くの時間を割いた女子バスケットボール部顧問としての毎日。どれをとってもかけがえのない人生です。

管理職になってからは、気持ちよく仕事をしてもらおうと「ハプニングはつきもの。むしろそのハプニングを愉しもう。」と言い続けてきました。先が読めない時代になってきています。思いがけないハプニングが待っていることでしょう。でもそれを愉しめる余裕は、周りの人とのチームワークと心の安定です。

『未来（とおく）を見つめて、現在（いま）を生きる！』 私はいつでも皆さんの応援団です。



「とてもよい教員生活だった」

前渡小学校副校長 町田 謙一

定年退職という大きな節目を無事迎えることができます。これも先生方、子供たち、保護者・地域の方々が支えてくださったからこそ、ここまで来ることができたと思っております。ありがとうございました。大学を卒業して2年間、民間企業に勤めたあと、

波崎町（現神栖市）の小学校からスタートした教員生活。毎日、子供たちと走り回ったり、喜び合ったり、語り合ったりと夢中でかけ抜けた36年間でした。日々指導で悩んだり、困ったりしていると周りの先生方から貴重な助言や支援をいただきました。「人生は長いよ。くよくよしないでやっていこう。」「授業で生徒指導をできるように！」「異動は最大の研修だよ。（赴任した学校で）最初感じたことを大切にしよう。」「何もやらないで批判されるなら、やって批判された方がいい。」等、その時々状況に合った的確な言葉に勇気付けられました。また、経験を積んでいくうちに、子供たちは「明るい先生」「授業の教え方が上手な先生」「公平な先生」を求めているのかなと思うようになりました。その教師像を追って追って追って現在に至ります。

大勢の方々に出会って「私はとてもよい教員生活だった。」とつくづく思います。今後は、お世話になったご恩を少しでも返していけるように、微力ながら努力をしていきたいと思っております。

コラム

今年度退職される先生方が採用された頃、1985年にSF映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」が公開されました。この映画には、1980年を起点に30年先の未来を想像した世界がストーリーの中に映し出されています。そこには、空飛ぶ車やテレビ電話、FAX等が描かれていますが、スマートフォンやインターネットはありませんでした。現在では、インターネットでの調査、資料の作成、遠隔での話合い、データの分析、プレゼンテーション等、児童生徒自身が一人一台端末を使って何役も活用することができています。グローバル化や人工知能・AIなどの技術革新が急速に進み、予測困難なこれからの時代ではありますが、長きにわたり、本市教育のためにご尽力いただいた2名の先生方の温かいお言葉を深く心に刻みながら、今後の教育を考えていきましょう。

「発達性読み書き障害研修」について

家庭や幼児教育施設・学校生活の中で

- ・文字に興味がない、覚えようとししない
- ・文字を一つ一つ拾って読む
- ・話または文節の途中で区切ってしまう

等の読み書きに困難を抱えている「読み書き障害」の児童生徒の理解、改善を図るため、本市で研修を始めて、2年目が過ぎました。現在、市内の多くの学校の特別支援担当者がこの研修に参加し、自校の該当する児童生徒に研修で学んだことを活用した支援を行っております。

この研修に参加することで、学校では、夏休み前に小学校1年生と中学校1年生全員に読み書き検査 (STRAW-R) を実施する方法や読み書き障害にリスクが見られる児童生徒を見付け、支援していく手順等を学ぶことができます。主な検査の流れについては以下のとおりです。



【夏休み前】

読み書き検査 (STRAW-R) を実施

【夏休み中】

トレーニング

【夏休み後】

再度読み書き検査を実施
→個別の支援を始める

「読むことが難しい」「何が書いてあるか分からない」と、読み書きに困難を抱えている児童生徒を早期に発見し、個に応じた支援をしていくことが、私たち教師にとって大切なことであると認識しております。校内外の先生方にも研修内容を共有していただく場を設定し、一人でも多くの先生方が、読み書きに困難を生じている児童生徒に対しての理解と適切な支援をしていけるように努めてまいります。

～ 研修受講生より ～

【勝田第一中学校 教諭 鳩山 裕子】

授業をするなかで、通常の学級に在籍する生徒でも、漢字を書いたり教科書を音読したりすることに対し、強い抵抗感をもっている生徒が存在し「学習障害があるのではないか？」と感ずることがありました。今年度、学習障害指導・支援プログラム研修講座に参加する機会に恵まれ、読み書き障害における検査方法や指導方法などたくさんを学ぶことができました。

本校では、各学年の先生方や特別支援教育部の先生方にご協力いただき、7月に集団式単語書字検査STRAW-Rを全学年全クラスで実施しました。学校全体で検査方法や採点基準等の情報を共有し、書字検査を実施したことで、本研修の目的の一つである読み書き障害についての周知を図ることができたのではないかと考えます。

書字検査の結果から、1学年生徒2名を対象に個別検査を実施しました。その結果、2名とも音韻認識能力と自動化能力の弱さが認められ、読み書きが困難である状態であることが明らかになりました。1名の生徒については、個別検査における102モーラ表記文字の音読及び書き取りを実施したところ、特に片仮名の濁音や拗音、漢字の習得が不十分であることも分かりました。この検査を実施しなければ分からなかったことであると考え、本研修の重要性を改めて実感するきっかけとなりました。また、検査結果から2名とも聴覚法が有効であることが分かり、保護者と本人の同意を得て漢字や片仮名の習得を目指し、トレーニングを開始したところです。講師の宇野彰先生によれば、聴覚法が有効になる条件は「知能が正常であること」「音声言語の記憶力 (AVLT) が良好であること」「文字を習得できるようになりたい」と本人の強い意志」の3つが重要になると述べています。トレーニングの結果がでるまでには、ある程度の日数が必要となりますが、生徒の「書けるようになりたい。」「勉強ができるようになりたい。」という気持ちに寄り添い、励ましながら根気強く指導していきたいと思っております。また、本研修で学んだことを学校全体で共有しながら、読み書きが困難である生徒に対する適切な支援・指導ができるよう自己研鑽に励んでまいります。

本校は、茨城県の「体育大好き推進事業」の拠点校（令和2～4年度）として、推進委員の専門的な視点を生かして「楽しい体育の授業」を目指し、児童が生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を身に付けるとともに、教師の指導力の向上を図っています。

楽しい体育の授業

児童が運動そのものの楽しさを味わい、「達成感が得られる」、「教師や友達とのかわりの中で学ぶ」、「認められる機会がある」授業を通して、運動が好きという気持ちを育てます。休み時間や家庭でも運動に親しむ機会が増えることが、結果的に体力の向上につながることを目指しています。

授業改善の主な取組

まず、基本的な授業の流れの確立を目指しました。本校では、15分程度のチャレンジタイム（感覚づくり等）と主運動（メインゲームや演技の練習等）の2つの活動を1時間の基本の形としています。また、複数の活動の場やグループを視覚的に理解できるようにし、十分な活動量を確保することで、運動の特性に応じた必要な感覚を養い、基本的な技能の習得を図っています。

次に、児童がめあてをもち、振り返る活動を大切にすることで、1時間の授業のねらいを焦点化することを目指しました。学習カードを活用しながら、教師の発問や児童同士の対話を通してこつを見付けたり、技能の向上を実感したりできるようにしています。

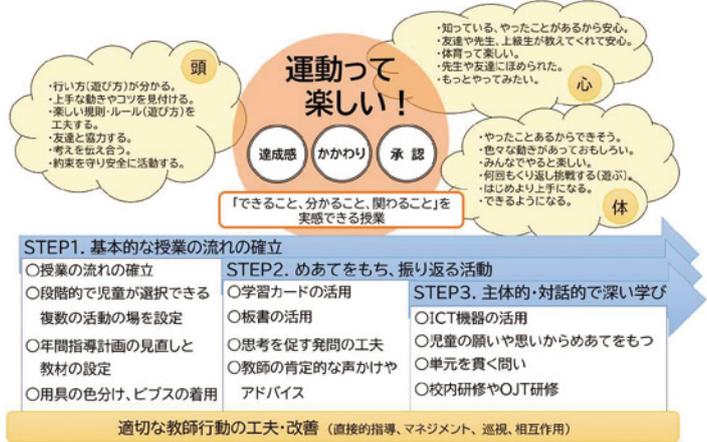
現在は、主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、研修を重ねています。児童の願いや思い、「？」を生かすため、教師の発問やフィードバックについて、教師同士が考えを伝え合い、試行錯誤をしています。

魅力ある学校づくりの視点から

「できること、分かること、関わること」を実感できる授業は、児童の居場所づくりにつながります。児童一人一人のよさや意見を生かして意図的に活躍の場を設けるとともに、教師が児童の手本となって進んで称賛したり励ましたりすることで、よりよい人間関係を築き、安心して学習できる場を児童とともにつくることを心がけています。肯定的な雰囲気の中で、学級のみんながチャレンジできるような前向きな言葉かけを、大切な学習内容として学べるようにしています。

まとめ

はじめは、本校の実態に合わせ、グループごとに学習カードをまとめるかごやBluetooth対応スピーカー、作戦ボードやビブス等の環境を整備することから始めました。児童が夢中になって授業に取り組むようになると、休み時間には授業で使ったコートでかけっこをしたりロケットを投げたりして遊ぶ児童の姿が見られるようになりました。授業改善が運動の日常化につながり、体力テストの結果にも成果が表れています。



本校における取組の全体図



休み時間のかけっこ



休み時間のロケット投げ

本校の体力テスト(A+B)の推移
R1:48.4%
R3:74.0%
R4:85.2%

本校の3年間の授業実践をもとに、次のデータをK-net(市内共有)内のフォルダに保存しています。ご自由にご活用ください。
① 単元の見直し(単元計画例) ② 各単元の授業展開例(活動の内容や場の設定等) ③ 学習カード ④ その他

データの保存場所: K-net(市内共有)-63 教職員-体育大好き推進事業

Enjoy Speaking English! ～児童生徒の英語力向上を目指して～

学習指導要領の改訂により、令和2年度から小学校5・6年生で外国語科が全面実施となりました。今年度の中学校1・2年生は、小学校で外国語科の授業を体験してきた生徒になります。グローバル化が急速に進展する社会において、英語によるコミュニケーション能力の向上は、これまで以上に求められているところです。

本市では、今年度、英語をコミュニケーションのツールとして活用し、他者と協働しながら未来を切り拓いていくことのできる子供たちを育成するために英語教育プロジェクト事業を立ち上げ、本市が目指す英語の授業づくりについて追究してきました。令和5年2月22日には、佐野中学校 大内 恵理子 教諭に授業を公開していただき、その授業をもとに、市内の英語科教員で授業づくりについて協議しました。

市内全小中学校で、児童生徒の英語力向上を目指して、授業改善を図っていきましょう。

ねらいを明確にした「授業デザイン」を

本単元は、一般動詞の過去形が扱われ、規則動詞、不規則動詞のきまりや使い方等についての理解及び、適切に活用する力を身に付けていくことをねらいとしています。



1 Warm-up の充実

- ・Warm-upでは、曜日や天候を尋ねるのではなく、“What did you study yesterday?” や“What did you have for dinner yesterday?”など、単元の目標である一般動詞の過去形を使って一人一人の生徒とAETとで英語を使った簡単なやり取りを行った。

2 毎時間の Small talk の実施

- ・“My wonderful trip” というテーマで、生徒同士が30秒間、互いにやり取りを行った。
- ・「言いたかったけど言えなかったこと」についてJTE (Japanese Teacher of English) とAETとで、英語を用いた中間指導を行った。JTEやAETがすぐに英語の表現について教えるのではなく、“How do you say ~?” を使って、生徒から適した表現を引き出した。
- ・生徒同士のやりとりの中でのグッドモデルを紹介し、既習の表現方法を確認することにより互いに伝え合おうとする意欲を高めた。



3 必然性のある単元のゴールの姿（単元終了時の生徒の姿）を生徒と共有し、学習課題を設定

- ・言語材料について理解したり練習したりすることが目的になっているような、単なる繰り返し活動のみを行うのではなく、生徒が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるように「Tell me about your wonderful trip for Mr.Zach!」という単元を貫く目標を掲げた。

< 参観者の感想及び参加者による協議から >

- Small Talkの内容が本時の内容に沿ったものであった。既習事項を入れながら、本時で身に付けたい力を意識させるために、毎回Small Talkを取り入れ、繰り返し言うことが大切だと思った。
- AETとJTEとの役割を明確にすることは大切だと思った。AETが質問した内容で、生徒が理解できない場合は、JTEがシンプルな英語で言い換える場面があった。自分の授業を振り返ると、子供たちに対して、いろいろ教えすぎてしまっているなど感じた。
- 先生が“Enjoy mistake!” という言葉を何度か使っていた。間違いを恐れずに言語活動をできるように声かけをしていくことが、生徒の意欲につながると感じた。

毎時間の Small Talk の実施を

Small Talkとは、小学校5・6年生で実施される言語活動です。児童が興味・関心のある身近な話題について、互いの考えや気持ちを楽しみながら伝え合う中で、既習表現を繰り返し使う機会をつくり、その定着を図るために行います。5年生は児童と教師のやり取りが中心、6年生は児童同士のやり取りが中心となります。

令和5年度の全中学生は、小学校におけるSmall Talkの経験者です。中学校でも、毎時間、授業の開始時にSmall Talkを行い、生徒の英語による言語活動時間を増やしていきましょう。

個別最適な学びと協動的・探究的な学びの充実に向けて — ICT教育専門研究委員会の取組 —

ひたちなか市教育委員会では、令和3年度に小学校教諭2名、中学校教諭3名、義務教育学校教諭2名の計7名によるICT教育専門研究委員会を立ち上げ、2年間にわたり「児童生徒の資質・能力を育成するための個別最適な学びと協動的・探究的な学びの充実」に関する研究に取り組んできました。

この度、2年間の研究の成果をもとに、パンフレットを作成しました。学校教育におけるICT活用に関する考え方や、各教科等におけるICTを活用した実践事例等を掲載しています。

パンフレットは、QRコードを読み込むことで、パソコン・タブレット端末、スマートフォン等から参照することができます。個別最適な学びと協動的・探究的な学びの一体的な充実による「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善にご活用ください。



専門研究委員会の話し合いの様子



参考資料

「市研究推進校」

美乃浜学園

地域の特色を生かしたアントレプレナーシップの育成を目指して

開校2年目の本年度は「探究を軸とした学びのスタイル（課題解決型）での学習指導～効果的なICTの活用とアントレプレナーシップの育成を通して～」を主題として研究に取り組んでいます。

昨年度は「一人一台端末を活用して、主体的に学ぶ児童生徒の育成」として研究を進め、児童生徒のアウトプットを主軸とした単元・題材構成の工夫を行い、児童生徒が自分の考えを伝える力の向上が見られるようになりました。

そこで、本年度はさらに「アントレプレナーシップ」というチャレンジ精神や創造性、探究心など、私たちの生きる社会をよりよくするために、失敗を恐れずに果敢に挑戦する気持ちの育成に取り組むこととしました。本校の目標の一つである「地域とともにあり続ける学校」との関わりの中で、地域の起業家・経営者とのコラボレーションを通して「どのように地域と関わっていけばよいか」「地域にどのように貢献できるか」などの「考え方」を学び、課題解決を目指す生活科・総合的な学習の時間の指導計画を立案しました。前期課程での町探検やサツマイモ作りなどの豊かな体験の充実から、後期課程での未来の地域像をイメージしたアイデアの提言まで、発達段階に合わせたものとしました。

特に6年生では、地域活性化のための様々な企画を立て、川崎キッズ基金への応募を通して、ひたちなか海浜鉄道など多くの皆様の協力を得て、駅から学校までの道を廃油キャンドルで照らすキャンドルナイトや大ちゃんくじらのキーホルダー販売の企画などを実行に移すことができました。また、普段の学習の中でも児童生徒のICTスキルを高めることで、いろいろな場面で自らICTコンテンツを選択して課題解決につなげることができています。来年度は、引き続き、教師のICT研修やICT事例集の作成から、より効果的なICTの活用、地域の起業家・経営者とのコラボレーションを通じた課題解決型の学習指導について研究を深めていきたいと思っております。



川崎キッズコンテストでの発表の様子



キャンドルナイトに向けて

学力向上推進プロジェクト事業に係るパワーアップ訪問

那珂湊第二小学校

本校は、今年度、県教委が実施する「学力向上推進プロジェクト事業に係るパワーアップ訪問」（以下パワーアップ訪問）の指定を受け、「確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり～主体的・対話的に学びながら、自分の考えを表現できる児童をめざして～」の研究テーマのもと、「自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成」及び「児童の学習意欲の向上を目指した授業改善」に向けて研修を進めてきました。

まず、児童アンケート、授業の様子、学校改善プランから本校の課題を明確にし、授業改善の視点を、①板書構成 ②課題設定の工夫 ③協働的な場面での方策 ④発問の工夫 ⑤活動時間の確保 ⑥ICT機器の効果的な活用の6点に絞り、授業者が選択して授業づくりを進めることとしました。第3、4、6学年で実施した研究授業の指導案検討は、複数回にわたってグループごとに行い、その都度、県教委や市教委の指導主事の先生方にも来校やオンラインで指導・助言をいただきました。第3学年の授業では、具体物の操作活動を取り入れたことで、児童の学習意欲が向上し、グループで試行錯誤しながら考えを練り上げることができました。また、第4学年、第6学年の授業では、ICT機器の効果的な活用により、導入の工夫や話し合い活動の充実を図ることができたと考えています。

このように授業改善に向け、全職員で研修ができたことはたいへん有意義であり、学校全体の研修体制が構築できたことも大きな成果であったと感じています。今後も「パワーアップ訪問」での取組をさらに深め、児童の学力の向上につながるよう、継続して授業改善に努めていきたいと思っております。



教育研究所研修を終えて

美乃浜学園 教諭 永井 裕樹

この度、「不登校児童生徒の適応指導に関する研修」に係る研修生として、本市の教育支援センター「いちよう広場」で1年間の研修をさせていただきました。

この研修では、通所生の実態を踏まえ、通所生が社会的自立に向けて、自分の感じていることや本音を相手により伝わるように自己表現する力を高めることをねらいとして、「環境づくりや相互交流のある活動によって関係づくりをし、自己表現力を高める支援の在り方」について研究を深めてまいりました。通所生と出会った時は、声のかけ方や接し方など、戸惑いや不安がありました。様々な方々からの助言をいただきながら、通所生の心の声に耳を傾けて接してきました。次第に、通所生が自分の想いを表現することで具体的な目標を立て、それに向かって行動に移すなど、言動にも変容が見られました。通所生には、今後も自分の想いを大切にし、自分の可能性に自ら蓋をせずに、自信をもって力強く歩んでほしいと願っております。

教育支援センター「いちよう広場」での1年間の研修は、これまでの自分自身の姿を振り返り、見つめなおす貴重な機会となりました。また、これからどのようにありたいか考える機会となりました。学校現場に戻っても、この研修で経験したことや学んだことを生かしながら、一人一人の想いに寄り添い、親しみのある関係づくりを心掛けていきたいと思っています。また、児童生徒が自己理解をし、悩みや困り感を適切に表現できるよう支援していきたいと考えています。この研修を通して、通所生や教育研究所の皆様、教育委員会指導課の先生方をはじめ多くの方々に関わることができたことは、貴重な時間となりました。今後も児童生徒と共に成長できるよう、より一層の研修に励んでいきたいと思っています。このような貴重な機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。



ひたちなか市教育研究論文最優秀賞を受賞して

三反田小学校 教諭 平澤 誉志幸

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るとともに、低学年の児童が運動することそのものの楽しさに気付くことを目指し、本研究を行いました。研究を終えて、以下の2点について改めて考えさせられました。

1点目は、児童生徒理解の重要性についてです。自らのこれまでの学習指導を振り返ると、授業のねらいに迫るため、体育の授業の学び方や効率的な学習の仕方を児童に教える場面が多くありました。しかし、東石川幼稚園での保育参観において、幼児教育における先生方の支援の在り方や園児の育ちと学びに触れ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示されるような子どもたちの学びの芽生えを感じ取ることができました。低学年の体育の授業においては、児童がわくわくするような環境を整え、児童の心に内在する「みんなで楽しく遊ぶ（学習する）ために大切なこと」を踏まえることで、教師の発問や活動の中で得られた児童の発見を生かし、学習を深めることができました。

2点目は、運動の楽しさについてです。中学校の保健体育科教諭としての経験を含め、これまで運動ができるようになるための手立てを大切にしてきました。しかし、それだけでなく児童が運動を好きになるような工夫をすることが、主体的・対話的で深い学びの基礎となり、児童にとって「できた」場面をつくり出し、結果的に体力の向上につながっていくことを実感しています。教師は、児童生徒にとっての運動の楽しさを深く理解し、授業における具体的な活動場面に生かすことが大切だと学びました。

貴重な研修の機会に、ご指導を頂きました先生方に心より感謝申し上げます。今後とも、自らが学び続け、目の前の児童生徒のために研鑽に努めてまいります。



三反田の森探検に行こう！

勝田第一中学校 教諭 埜 幸志郎

現在の中学3年生は、小学校の卒業式は縮小、中学校入学直後に休校、校外学習の中止など、様々なことが制限されていました。そのような状況でも、笑顔で学校生活を送る子供たちに対して、「学校ができることは何か？」ということを考えるようになり、本研究がスタートしました。コロナウイルスの影響以外にも、世の中では「コスパ」、「時短」の考えが広まりました。無駄をできるだけ省き、短い時間で結果を出すことに大人も子供も必死な社会になってしまいました。しかし、そのような状況下だからこそ、「たくさんの経験をさせたい」と思いました。

研究を軌道に乗せるのはとても大変でしたが、行事を通して、友達の良さを見つけ、その良さを認め合える学年に成長できたと思います。じゃんけん大会、クイズ大会、けん玉大会など、数えきれないほどの学年行事を行いました。これらの経験が、子供たちの未来にどのような影響を与えるのか、今はわかりません。準備にかけた時間も莫大で、決してコスパが良いものとは言えません。しかし、何かの役に立つはずであると信じています。

今後の課題は、「働き方改革」や「ブラック校則の見直し」など、時代の流れとともに変化していく社会の考え方と学校現場の状況を対比しながら、時代にマッチした教育や働き方をすることです。現場は様々な課題が山積みですが、一人で頑張るのではなく、「チーム学校」をキーワードに、チーム力で勝負ができる学校を目指して日々精進していきたいです。



学年を振り返るDVD

令和4年度の「ひたちなか市教育研究論文」には、幼稚園3点、小学校12点、中学校8点、義務教育学校2点、合計25点の応募がありました。厳正なる審査の結果、最優秀賞がお二人になりました。お二人とも甲乙つけがたく、素晴らしい実践を丁寧にまとめた論文になっています。他にも今日的な課題を踏まえた創意あふれる実践等をまとめた論文が多数ありました。ぜひ、「ひたちなか市教育研究論文集 第28集」をご覧ください。

今年度は、ひたちなか市教育研究所の関口拓生研究推進員を講師として論文作成研修会を実施しました。多くの先生方に参加していただき、第2回研修会では、論文作成についての個別指導を行いました。次年度も同様の研修を計画しております。お忙しい中であっても、論文の執筆及びその支援にあたっていただきました先生方、ありがとうございました。